

海のシルクロードを介した東西交流の歴史 <西洋列強に負けなかった日本>

コース・専攻：国際交流・協力

グループ名：マリンロード

メンバー：竹田 正俊^{リーダー}・伊賀 元俊^{副リーダー}・安達 有吾・磯田 敏子・崩山 利枝子

1. テーマ選定理由：16世紀の大航海時代以降、西洋列強はアジアへ進出し、多くの国を植民地化した。その中で日本は植民地化を免れて近代国家への移行を果たした。では、なぜ日本は植民地化を回避できたのか。この問いは、日本の近代史を理解する上で重要であると共に、現代の大国の覇権的圧力が顕在化する国際情勢を考える上でも示唆に富む課題である。本学習では、当時の日本の植民地化回避要因を分析し、現代の我が国が直面している課題理解のための示唆を得ることを目的として、本テーマを選定した。

2. 学習方法：図1に示すように、16～19世紀の日本は二度の植民地化危機に直面した。第一は16世紀末のスペイン・ポルトガル来航期、第二は19世紀幕末のペリー来航以降の欧米列強進出期である。

本学習では、①16世紀末、②江戸鎖国期、③幕末期の三局面に区分し、各局面で日本が植民地化を回避した要因を分析・考察した。

3. 学習結果：学習を通じて下記の知見が得られた。

(1)第一の危機への対応：秀吉による強固な国家統一が形成された時期であり、戦国大名による強力な軍事を背景に、キリスト教禁教令を発布して西洋列強の介入を抑制し、植民地化を阻止することができた。

(2)第二の危機への対応：幕末期、国内は政権交代で混乱を極めており、植民地化の危険性が極めて高かった。しかし、日本は柔軟な外交対応と鎖国期に培った知的能力を活用して植民地化を回避していった。

(3)鎖国期での対応：鎖国期は、単なる停滞期ではなく、日本が西洋の学問・文化を主体的に受容し、それらを教育や社会制度に統合して、国家全体としての実力を涵養した時期であった。こうして形成された実力の蓄積が、植民地化回避に大きく貢献したことが明らかとなった。

4. 分析と考察：学習で得られた植民地化回避要因について、その影響度を数値化して比較分析を行った。

その結果、図2と図3に示すように、植民地化回避は単一の要因によるものではなく、複数の要因が複合的に作用した結果であること、また、その影響度の強さは時代とともに変化していたことが明らかとなった。さらに、植民地化されたフィリピンやインド、植民地化を免れたタイとの比較を通じて、本分析の妥当性を検証した。

5. フィールドワーク：下記のフィールドワークを行い、学習の理解を深めた。

(1)蘭学の聖地・適塾を訪問。また大阪で「オランダ交流特別展」を参観。

(2)江戸期の異文化交流の地・長崎を訪問し、東西交流の足跡を調査。

(3)開国の舞台となった横須賀・横浜・東京を訪問し、開国の足跡を調査。

5. まとめ：本学習を通じて得られた多くの知見は、現代の大国の覇権的圧力が顕在化する国際環境を検討する上で多くの示唆を与えるものであり、今回の学習成果をもとに、さらに考察を深めていきたい。

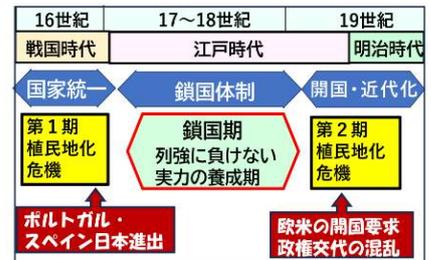


図1 日本の植民地化危機

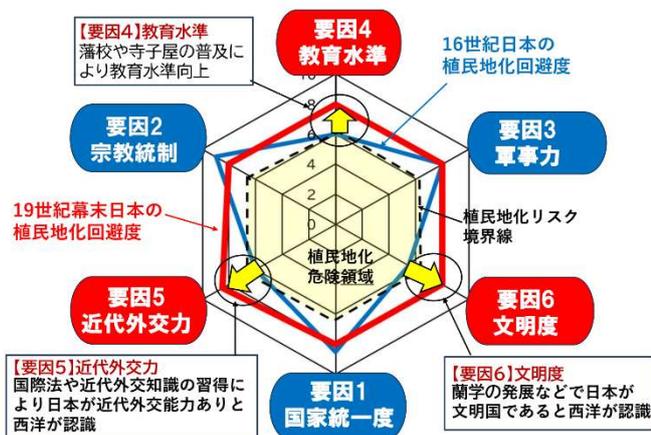


図2 16世紀と19世紀における日本の植民地化回避度比較

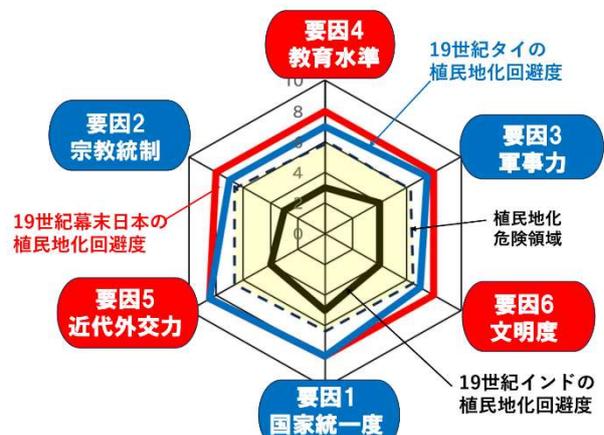


図3 19世紀のタイとインドとの植民地化回避度比較